

校長室だより～和光高校今昔 第19号 H26. 9. 12

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

放送部の活躍

平成14年度末に発行された「若樹第29号」の最終頁に掲載された放送同好会の記事を紹介する。

こんにちは、放送同好会です。放送同好会は今年5月にできたばかりの部活です。3年



生は5名、1年生は2名で活動しています。6月にはNHK杯全国放送コンテストの西部地区大会に参加し、川越女子高校で120名の参加者の前でアナウンスと朗読を行いました。ラジオ番組も制作しましたが残念ながら予選を勝ち抜くことはできませんでした。11月の第21回高校放送コンクールでは1年生が参加し、アナウンス・朗読とも決勝に残ることができました。番組部門も決勝に残り、今決勝に向けて練習に励む毎日

です。これからの目標は、早く部になって活動したいことと、部員を増やすこと、県大会出場は達成したので、全国大会に出ることです。私たち3年生は卒業してしましますが、後輩にぜひ頑張ってもらいたいと思います。

翌年から、ここに示された目標を放送部はすべて実現することになる。

そもそも和高に放送部は存在せず、専ら放送委員会が、校内放送や行事の際の準備・アナウンスを担当していた。初代教務主任の藤本裕之先生は、図書視聴覚の主任も兼ねており、趣味であった8ミリカメラや最新鋭のオーディオ機器（自前のもの、とても当時の学校予算では購入できない）を駆使し、2期生の入学式をはじめ開校当初の風景など様々な記録を残しておられる。

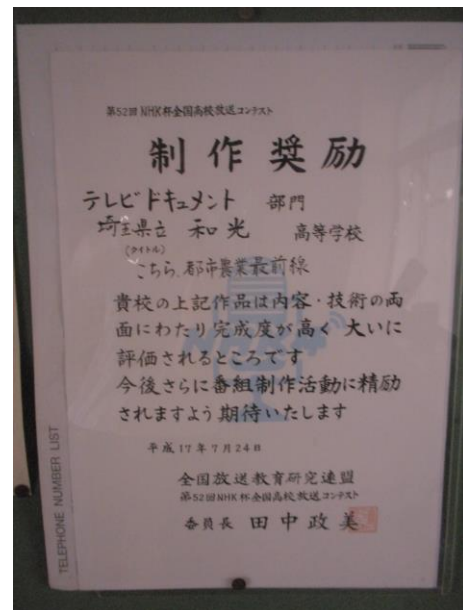




また、後に川越女子高放送部の顧問として埼玉インターハイを支えることになる榊原康夫先生が藤本先生の後を継ぎ、昭和の時代の「放送」は見事に営まれていた。長年にわたりオーディオマニアの先生方による高水準の指導が和光高校の放送を支えていた。

ところが、平成14年の福田宏子教諭（現浦和一女高勤務）の着任に伴い創られた放送同好会（その年のうちに部に昇格）によって、小学校や中学校も含めこの学校にも存在する「放送」の仕事が革新された。そしてこの瞬間から和光高校放送部の名前が日本全国を席卷することになる。

以下は福田が育てた生徒たちによる主な制作作品である。



オーディオピクチャー部門

平成14年度「みどりのそよ風」	優秀賞
平成15年度「遺跡のある町」	最優秀賞（県知事賞）
平成16年度「北の斜面に守られて」	最優秀賞（県知事賞）
平成17年度「新倉の道」	優秀賞（高文連会長賞）
平成18年度「伝統を受け継ぐ」	優秀賞（高文連会長賞）

ビデオメッセージ部門

平成15年度「湧水とともに」	最優秀賞（県知事賞）
平成17年度「古民家を守る町」	最優秀賞（県知事賞）
平成18年度「お宿はどこだ」	優秀賞（高文連会長賞）

テレビドキュメント部門

平成17年度「こちら都市農業最前線」	制作奨励賞（NHK主催）
--------------------	--------------

これらはすべて埼玉県代表として全国高校総合文化祭等に出品されている珠玉の作品である。

タイトルからも推し量れるように「郷土」をベースに和光の地を全国に紹介するという総文祭（全国大会）の本質的な役割も果たしているのだ。この時期他校で勤務していた私は、この快挙に喜び驚きながらも愚かにも所詮指導者の素晴らしさだろうと本質を見誤っていた。しかし調べるうちにこのことが大きな誤りであったことに気付く。



「生徒ありきで指導されている」この言葉は川越女子で偶然ながら福田の後の放送部の顧問となった前述榊原の言葉である。川女だからとか和光だからではなく徹底的に生徒を鍛えていく。主体性を何よりも尊重し、時たま与える適切なアドバイスと目標が無限の力を引き出す。何よりも生徒に真摯に向き合うのが福田の指導である。自ずと生徒たちが反応していくようになる。この間の忍耐と我慢は想像もできない。「真に伝えたいものは何なのか」を時間を惜しまずに探求していく。その結晶が上記の作品である。賞はあくまでも結果に過ぎず制作の過程こそが尊重されるというのがおそらく福田の根底の理念であろう。



全国の舞台には平成21年に朗読部門でも張ヶ谷友美が三重の総文祭に参加している。本人の努力と才能は当然だが福田の後を受け継いだ荒木美香（現浦和南高勤務）らの指導の成果であった。

放送部は現顧問椿洋之の下健在であり和光市のイベントや学校行事には欠かせない存在となっている。「地域に根ざした学校」の原点が和光高校放送部DNAを受け継がれている。とりわけ全国の舞台での頑張りは和光高校の歴史を彩る素晴らしい活躍であった。管理棟2階放送室には和光高校の歴史が変わらず大切に納められている

